

仏像と一対一で対面するときは、丸裸の自分が見られているくらいの意識で対面することが大事です。私自身、神仏の視線をできるだけ意識して日常生活を送りたいと思っております。

興福寺 寺務老院（前 貫首）

多 川 俊 映 師



2019年6月10日、興福寺本坊にてインタビュー

▶ 創建当時の建築を意識して再建し、伝統を守る

—— 法相宗の特徴を教えてください。

日本の宗派はたくさんありますが、一番古い宗旨と考えてください。中国の唐時代に玄奘三蔵げんじょうさんざうの弟子の慈恩大師が一宗にまとめられ、遣唐使によって日本に導入されました。元々は法隆寺を含めて法相三本山と言っていたのですが、現在は法相二本山として興福寺と薬師寺から3年交代で管長を出し合い、今年の8月末まで私が管長を務めていました。

法相宗では、全てのことを心の要素、心の働きに還元して考えるというのが基本的な考え方です。例えば私たちは肉体を持って生活していますが、肉体は簡単に言えば物質であり、その肉体を管理しているのは心の深い部分であると考えます。最終的にお釈迦さま、仏の領域にまで近づいていくというのが法相宗の考え方です。

—— 何事も気の持ち方次第ということですか。

それも該当します。一人の人間でも状況が変われば心の有りようも変わるわけで、年齢を重ねると社会に対する見方も当然変わってきます。

日常、人は皆同じだという意識がなんとなくありますが、実際にはそれぞれ微妙に違います。同じような状況で同じようなものを見ている、生活体験や問題意識の有無・程度などにより認識の仕方が違ってきます。違って当たり前だということを前提として人間関係を作り上げていくと、より深い人間関係ができると思います。

—— 興福寺の創建は、平城京遷都と同時期だということですが。

興福寺は藤原鎌足かまたりが開いた山階寺やましなを起源とし、飛鳥に移って厩坂寺うまやさかとなり、平城京遷都に伴いこの地に移って新たに興福寺と名付けられました。

平城京遷都の際、都の造営にも興福寺の創建に

も藤原不比等という権力者が関わっているため、興福寺の立地は京内で一番良い場所にあり、平城京の中心からは東に3.5kmしか離れていません。春日山の西の麓が丘陵地になっており、その西端に興福寺が建っています。平城京から東側を見ると、丘陵地の先端に興福寺の堂塔が見え、こちらからも平城京を一望できます。興福寺のある場所を正しく理解しないと、興福寺を正確に理解することはできないのです。

——創建時の境内はもっと広がったそうですね。

今は約2万6,000坪ですが、昔はその2倍ありました。明治政府が全国の社寺境内地を公園利用しようと考え、興福寺も多くの敷地を召し上げられて奈良公園として利用されてきました。

県庁と興福寺の間にある大宮通りも、元は興福寺境内の道でしたが、片道一車線だった道路が、1960年代に北側に拡幅されました。また、県庁前を南に一方通行の道が走っていますが、約7割の底地は興福寺が所有しています。先々代の貫首が、地域の動線に配慮して自主的に開放したもので、この道が無かったら周辺の動線は混乱していたと思います。

——大きな火災の被害もあったと聞いていますが。

全焼は5回ほどありましたが、小さな火事まで数えると160回ぐらいあったようです。昔は軍事集団を持っていたので、戦いで焼かれたこともありました。治承4年(1180年)の南都焼討は有名ですが、兵火だけではなく、もらい火による類焼のほか、落雷による火災も結構多かったようです。

中金堂も7回焼けており、今回の再建は「七転び八起き」だと言っております。やはり中金堂が一番大事なお堂ですし、メインの建物がないというのはおかしい話ですからね。

——興福寺では、創建当時の建築を意識して再建されているそうですね。

中金堂だけではなく、五重塔や東金堂、

北円堂もそうです。興福寺は割に保守的なのです。技術の進歩もありますから完全に元の通りという訳にはいきませんが、基本的にはできるだけ元と同じようなものを作ることを心掛けています。

五重塔だけでなく、三重塔や東金堂、北円堂も国宝です。一般の方が、目の前に立つ建物が国宝であると意識していただくと、境内を歩かれる際の気持ちも大きく変わると思うのですが。

——一般の人からすると、奈良公園の中にあるお寺という印象が強いと思いますが。

1952年に旧興福寺境内の一部が境内地として戻ってきました。地目は境内地です。名勝という指定が重なり、そこに天然記念物の鹿もいるので、奈良公園と一体という雰囲気になっていますが、境内の所有権・管理権がある立場からすると奈良公園という認識は困るわけです。

——多くの人が自由に出入りしている所を適切に守っていくというのは大変ですね。

今は一部に鉄柵をしていますが、戦後、私が小さい頃には全くなく、本当に出入りが自由でした。それでは少し保安上の問題もあるということで、先々代が県と侃々諤々の議論を経ながら鉄柵を少しずつ設置してきたようです。

本来ならば管理権がありますから、境内を完全に囲ってしまうこともできるわけですが、可能な限り昔のありのままの姿を残したいという思いもあります。



▶ 仏教書に誘われ、いろんな方々の教えによって仏の道に導かれる

—— 最初から仏門に入るおつもりでしたか。

元々は写真家になりたかったのですが、父からの反対もあり、最終的にあまり調べもせず立命館大学文学部に入学しました。心理学を専攻していましたが、臨床心理学に近い勉強は、実際には先輩たちが作った研究会でやっていました。

大学時代は、仏教の世界に進むとは考えていませんでした。のちに分かったことですが、法相宗の考え方は全てを心に還元するというものでしたから、心理学という学問的な面からも法相宗の考え方を見つめることができ、非常に入りやすかったという面はあります。

学生の頃は大学紛争がひどく、最後の1年は授業がありませんでした。勉強する雰囲気にもなれず、キャンパスに行くのが嫌になっていました。

4回生の時に京都駅近くにある龍谷大学の仏典翻訳室に時々お邪魔し、藤本 龍 暁 名誉教授のお話を聞く機会が多くありました。穏やかな口調で話される内容は、取り立てて仏教の話をされた訳ではなかったのですが、紛れもなく仏教の世界でした。

また、大学の図書館でたまたま手に取った「唯識心理学」という本との出会いも、なかなか巡り合えるような本ではなかったので、とてもラッキーだったと思います。当時は、ぶらぶらして仏教の本ばかり読んでいて、次第に仏教の世界も良いと思うようになっていました。

考えてみると、仏教書に誘われ、藤本先生をはじめいろんな方々の教えによって、自然に仏の道に導かれたのだと思います。

—— 興福寺に奉職されてからのご活動は？

大学を卒業して間もなく興福寺に入りましたが、当時はまだ真剣に仏教に向き合う意識はありませんでした。昭和40年代のお寺は古色蒼然としており、因習みたいなものもありました。弟子・師匠の関係ですから、気に入らないものでも気に入らないと言えません。一般職員の人も勤めていま

すが、就業規則ありませんでした。

奉職後1～2年が経ち、西大寺長老の松本和上（受戒の師）のもとで修行することになり、そこで本格的に仏教に取り組むようになりました。和上が兼務されていた生駒山の中腹にある宝山寺にひと夏ご厄介になり、密教の修行を行ったのです。僧侶としての心構えなど、多くのことを教えていただきました。

—— 僧侶のお勤めは掃除が多いそうですね。

掃除は多かったです。人が少なかったのも、それこそ何でもやりました。天候に関わらず庭掃除のほか、来客があればお茶出しもします。障子の張替えも上手くなり、師匠からどこへ行っても居候できると言われたぐらいでした。

—— 堅義^{りゅうぎ}は何歳の時にされましたか。

※僧侶の実力を検定するために行われる論義問答。

30歳の頃です。全国で堅義と称するものを行っているお寺は多いですが、今でも法相宗では暗記させ、手に何も持たずに口頭試問で行います。昔のお坊さんは仏教の本を読んで勉強するよりも、問いに対して答えるという問答体で学びました。今は、ある程度台本のようなものが出来ており、それを3週間程で覚えます。

1977年夏から準備を始め、10月23日頃から加行部屋に入りました。加行部屋はとても狭く、机が一つあるだけ。そこで三七日（21日間）、座睡・二食（食事は2回）・無言で勤めます。ずっと座ったまま問答集や関連する仏典等を読みふけます。座睡なので脚がしびれて熟睡できず、やることといたら覚えることだけです。

最終的に無事に口頭試問で合格をいただき、11月下旬に興福寺の子院、菩提院の住職に任命されました。堅義を満行すると、一応一人前になったということになっていますが、実際はそこからのスタートです。私は1989年に、企業でいう社長にあたる「貫首」という職に就任しましたが、堅義を経たからと言って必ずしも貫首になるとは限りません。巡り合わせもあったのだと思います。

▶中金堂再建は、みなさんの思いが集まって実現

——貫首にご就任後の最初の大きなお仕事は？

南円堂の平成大修理です。春日大社との神仏習合思想に立脚する当山にとって南円堂の価値はとても高く、本堂と同格に位置づけられています。興福寺の伽藍諸堂の中で最も顕著に神仏習合の色合いを残しており、正面扉の上に注連縄が引かれ、お堂の中に春日赤童子^{あかどうじ}の神像が祀^{まつ}られています。また、時の権力を振るった藤原氏の氏寺であるという歴史的な意味においても重要と考えています。

1717年（享保2年）の大火災で当山は伽藍^{がらん}の中央から西半分が焼け落ちましたが、南円堂は1797年（寛政9年）に再建しました。中金堂よりも再建が早かったのは、西国三十三所観音巡礼の第九番札所として、広く民衆の信仰を集めてきたことにも由来すると思います。

——南円堂の平成大修理に続いて、中金堂の再建に向けた取り組みを開始されたのですね。

そのとおりです。明治時代の伽藍修理は五重塔から始まり、東金堂などのお堂を修理し、最後に南円堂の修理に着手しました。修理を終えて一定期間が経過すると、また修理は五重塔から始まるわけです。この合間を縫って中金堂をなんとか再建したいという思いから取り組みました。

実際、昨年に中金堂の落慶を終え、来年、再来年頃から再び五重塔の修理が始まる見込みです。

——中金堂を再建する意義は何でしょうか。

当山は三金堂制なのですが、いくら五重塔や南円堂が有名でも、やはり中心となるお堂がないと話になりません。平城宮跡の大極殿と比べると、形状は異なりますが、大きさはほんの僅かだけ中金堂が小さくなっています。これも藤原不比等の奥ゆかしいところでしょう。

文化財の修理・修復には補助金等が出ますが、中金堂再建は宗教行為なので全く出ていません。約60億円の再建費用は、多くの方々の寄進などで賄われました。みなさんの思いが集まって再建できたからこそ、とても尊いのだと思います。

平成の時代は、今までの常識や良い習慣が段々なくなり、殺伐とした雰囲気もありましたが、そう捨てたものではないということでしょうね。

——今、境内を歩いていると、天平時代の空気が漂っているような雰囲気ですね。

元々あったものを忠実に再現したわけですが、あるべき所にあるべきものがあるのと、そうでないのとでは、境内の雰囲気が全く違うのだと思います。境内をよく通る人から、「中金堂が昔からあったように思う」と言っていたいたのですが、これは私たちにとって一番うれしい言葉ですね。



▶神仏の視線を意識して日常生活を送りたい

——興福寺は多数の国宝や重要文化財等の仏像を所蔵されていますが、その特徴を教えてください。

奈良は文化財的にいうと「フタコブラクダ」ですね。最初のピークは阿修羅像などの天平時代の仏像で、二つ目のピークはその後の運慶などによる鎌倉彫刻。その多くを所蔵していますので、興福寺にお越しいただいたら、一か所で奈良の魅力を見ていただけます。

——運慶、康慶の仏像などが難を逃れて今に残っているというのは、素晴らしいことですね。

我々にとって最も大事なものはご本尊ですが、^{じょうろく}丈六（1丈6尺：約4.85m）で大きく重たいため、火災の時に運び出せないわけです。そのような中、幸いにも火災の度に無事に救出されてきた仏像ということでは、天平時代の作である阿修羅像などがその典型と言えます。これらは天平乾

漆群像で、中が空洞になっているため重さが15kgほどしかなく、体格の大きな人でしたら両脇に二体を抱えて担ぎ出すことができたわけです。

——阿修羅像のファンクラブもあるそうですが、ご自身から見た阿修羅像の魅力は何でしょうか。

阿修羅像は、かつて西金堂に安置されていた八部衆の中の1体です。お釈迦様の教えを守るために、ほかの八部衆や四天王はみんな甲冑を身に付け、剣などを持っていますが、阿修羅像は甲冑も外し、武器も持たずに丸腰で完全に争うことをやめています。「もう一切、他者と争わない」という姿勢の表れでしょう。本当に良いお顔をしています。今、世界各地で軍拡が進む中、そういう目で阿修羅像を見つめることも大切です。

また、一般に「優しい顔」という意見が多いですが、光の当たり具合で表情が変化し、下から光が当たると結構怖い顔をしています。修羅道、修羅場とよく言いますが、阿修羅は帝釈天など他者と絶えず争い、敵対してきました。そういう過去の生き様を見つめているような目が魅力的です。

——国宝阿修羅展や運慶展など、多数の美術展を開催してこられましたが、その意義・目的は？

興福寺をより良く知っていただきたいという言葉ですね。美術展は、境内整備や中金堂の再建などの興福寺の取組みを社会に対してアピールする機会だと思っています。

パリで開催したこともあります。あれは日仏文化交流の一環で行われたもので、文化庁の当時の担当官から要請があったものです。文化庁には色々とお世話になっていることもあり、喜んで協力しました。当時、日本を大好きなシラク大統領は、都合3回拝観に来られました。

今年（2019年）は1月から3月にかけて、パリのギメ東洋美術館で「古都奈良の祈り」展（主催：奈良県、同美術館）が開催され、木造金剛力士立像の阿形・吽形の2体（いずれも国宝）と木造地藏菩薩立像（重要文化財）の寺宝3点を展覧しました。

——ご自身の著作のなかに『仏像 みる・みられる』という本がありますが、仏像を見る時の心構えのようなものを教えていただけますか。

例えば、いつの時代の制作か、作者は誰か、素材は何か、手に持っている持物とその意味などを気にして仏像をご覧になる方がいますが、それはあまり好ましくありません。もちろんそれぞれの持物には意味がありますが、あまり勉強しないで予備知識を持たずにご覧になるほうがいいです。

仏像と一対一で対面するときは、丸裸の自分が見られているくらいの意識で対面することが大事です。そうすると、こちらから仏像を見ている一方で、向こうからの眼差しも意識します。その「見られている」という意識が大事なのです。そういう見方をしていると、忘れた頃にふと大切なことに気づくことがあります。

仏像を「見る」という人中心の能動性よりも、実は「見られている」という受動的な、パッシブな面が宗教では大事です。誰も見ていなかったら、人は悪いことをしてしまいがちで、少しぐらい下品な言動をしても気に留めなくなりますが、そこに他人がいると、やはりちょっと言動を控えるようになると思います。神仏の視線を感じている人だったら、やはり神仏が見ているからと思って、言動を少しセーブするようになります。これはとても大事なことです。

私自身、神仏の視線というものをできるだけ意識して日常生活を送りたいと思っております。また、人さまにもそのようにお勧めしています。

▶奈良に関する造詣を深めていただきたい

——奈良県観光の現状について、ご意見をお伺いできたと思うのですが。

奈良県の北和は、興福寺や東大寺、春日大社があるこのエリアに寺社が集まっており非常に濃密ですが、南部にある文化財や自然をどのように取り込みながら奈良県観光を活性化していくかが課題になっています。

県内を広く観光していただこうとすると、奈良県内に泊まっていただく宿泊施設があまりにも少なく、もっと増えてもいいと思います。

夕方5時過ぎぐらいから奈良の駅前も人が少なくなり、何となく寂れた感じがします。その影響もあって、多くの方が大阪へ行って、または戻って飲食されているわけです。奈良に泊まってもらわないと、奈良で消費していただけませんからね。



——奈良県への思いや期待をお聞かせください。

奈良県は非常に歴史が豊かなエリアですから、奈良を訪れた知人などに、奈良の歴史や観光の話題を提供して話を盛り上げるというのは、ホスピタリティの一つとして大切なことです。

奈良の歴史を学ぶことは、奈良に住んでいる者としての最低限のマナーだと思います。奈良に関する造詣を少し深めていただければと思います。

興福寺では、三重塔の横の興福寺会館で毎月第2土曜日の午後1時から「興福寺佛教文化講座」（無料）を開催しています。講座は400回以上続いており、毎回200人以上の方が参加されています。

▶進むべき道を早く決め、それに一途になる

——最近の不安な世相について、ご意見をお伺いしたいのですが。

確かに凶悪な犯罪が多いですが、例えば永井荷風の「断腸亭日乗^{だんちょうていにちじょう}」という日記を読むと、昭和11年にも、ほとんど今と同じような凶悪な事件が多く書かれています。

人間というのは、時代が変わっても同じようなことをやっているのです。凶悪な犯罪が多いのは今に限ったことではありません。法務省の人に聞くと、事件の件数自体は減っています。これだけひどい世の中になっているとみなさんが感じる背景には、マスコミ報道の影響もあると思います。

昔は良かったと思いがちですが、それは大きな間違いです。どんな時代にも変な人は存在します。その一部分だけを取り上げて、段々時代が悪くなったという話にはならないと思います。

——愛読書は「^{さいこんたん}菜根譚」だそうですね。

はい。本の著者は、仏教と儒教、道教を学んだ人で、それらのエキスをまとめています。簡単に言えば、これ1冊を読めば東洋を代表する三つの思想・考え方が分かるということです。

日本に紹介されて200年も経っていません。ブームにはなっていませんが、宗教関係者だけでなく、経済人、政治家、スポーツ関係者まで幅広い方が愛読されており、静かに読み継がれています。これは古典の一つの特徴と言えます。私が解説している本^(*)も出版しています。

*「心を豊かにする菜根譚33語」（祥伝社黄金文庫）

——是非、拝読させていただきます。これまでに多数の本を執筆されていますが、その意図は？

仏教や唯識などを分かりやすく伝えたいという思いから、40年ぐらい執筆を続けています。幸いなことに、こちらから売り込まなくても、書けば出していただけるという版元がいくつかありますので、ありがたいことです。

「唯識入門」という本は、当初の中身を見直してタイトルを2回改題し、出版から約30年来で版を重ね、計3万部ぐらい発行しています。

——座右の銘とされているものはありますか。

昔はありましたが、この頃は特にありません。座右の銘に近いものをあげるとしたら、例えば愛読書の「菜根譚」に『錯集成文^{まじあや}（^{まじ}錯り集り、文を成す）』というのがあります。

*種々さまざまなものがあるその中にこそ美しさがある。

多様性のすばらしさ。『菜根譚』後集五五の一句。

例えば、どこ行くにしても同じようなタイプの人間ばかりが集まって行動していると、気楽ですが発展性がありません。

一方、そこに色々な考え方を持つ人が入ってくると、相手からどのような言動が飛んでくるかわからないため緊張もしますが、それが豊かな社会を構成する一つの要素にもなります。

例えば戦前の日本のように単一の考え方だけでまとめようとする、やがては問題が起こります。戦争の時の色は、カーキ色（枯草色）一色という感じですが、そうではなくて赤色や黒色、黄色などもあるという世界のほうが、やはり最終的には豊かになります。いろんな人が集まるということが理想なのです。

—— 互いの違いを認めて多様性を受け入れることが好ましいということですね。最後に若い人へのメッセージを一言お願いします。

なるべく行くべき道を早く決め、それに一途になるということだと思います。そこがふらつくと、思いもつかない所へ流されていくことがあります。

どうしたら良いかということは、自分で考えるしかありません。やはり自分の行くべき道はこうだ、これでいきたいというものをなるべく早く決める。そしてそれに一途になることです。

たとえ失敗しても、再挑戦すればよいのです。逆に、あてがわれたことをやって途中で気に入らなくなってしまうことは最も良くないです。自分の行くべき道をはっきりと持っている人は、たとえ何かで失敗しても立ち直れると思います。

また、せっかく良い会社と思って就職しても、短期間で辞めてしまう人が多くいます。若い人からは「雑用をさせられた」という話もよく聞きますが、実は仕事のほとんどが雑用なのです。雑用だから仕事に身が入らないというのではなく、一つ一つのやるべき仕事をきっちりとやっていくことが大切です。そうでないと、本当に大きな仕事が来たときに対応できません。

●プロフィール 多川 俊映 師

■主な経歴

1947年、奈良県奈良市生まれ。1969年立命館大学文学部哲学科（心理学専攻）卒業、同年興福寺に奉職。1977年興福寺子院・菩提院住職に就任、1989年興福寺貫首に就任、2016年法相宗管長に就任、2019年8月退任、同年9月寺務老院に就任。公益財団法人美術院評議員、帝塚山大学特別客員教授などを務める。

■主な功績

1997年、重要文化財・南円堂の平成大修理落慶法要を厳修。翌年、境内整備事業に着手、「天平の文化空間の再構成」に取り組む。2018年10月、中金堂再建落慶法要を厳修。2019年5月、興福寺本願・藤原不比等公1300年遠忌を厳修。

パリ市グランパレ美術館「日本仏教美術の宝庫：奈良・興福寺展」（1996年：約15万人参観）、東京国立博物館・九州国立博物館「国宝阿修羅展」及び興福寺仮金堂「お堂でみる阿修羅」（2009年：約190万人参観）などの仏教美術展を数多く手がけてきた。唯識論や仏教文化論の研究・執筆、講演活動も多数行っている。能や詩、音楽などへの造詣も深い。

■主な著書

- ・『心に響く99の言葉 東洋の風韻』学研M文庫
- ・『唯識入門』春秋社
（旧『はじめての唯識』の改題増補・新版）
- ・『心を豊かにする菜根譚33語』祥伝社黄金文庫
- ・『仏像 みる・みられる』角川書店 など

■法相宗大本山興福寺の概要

興福寺は奈良七大寺のひとつ。天智朝の山背国「山階寺」が起源で、飛鳥に移って「厩坂寺」となり、平城京遷都の際、藤原不比等によって移され「興福寺」と名付けられた。藤原氏の氏寺として奈良時代から栄え、1300年もの長い歴史を今に伝える。1998年に「古都奈良の文化財」としてユネスコ世界文化遺産に登録された。

（島田清彦）